
チート国家、異世界へ

ファイナルトム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

チート国家、異世界へ

【Nコード】

N2065Y

【作者名】

ファイナルトム

【あらすじ】

日本が無く別の国家が存在していた世界・・・チート国家とよばれた国が他の世界へトリップしてしまう。

トリップの日（前書き）

国家クラスのトリップに挑戦してみました。

トリップの日

この世界はちよつと違つた世界・・・寿命の概念が無く、言語のみ世界共通語で日本という国がない世界。

日本の大陸はユリシースという民主主義国家があつた。

地震予知センター

「お定番だね。」

「はい！？お定番？」

「独り言、独り言・・・というか・・・」

「おつと地震予測が出来たぞ。久しぶりの地震だな・・・」

「会いたかつたにしか聞こえないぞ？」

「会いたくないさ！まあ・・・１ヶ月ぶりだけど。」

「なんじゃこりゃ！？首都直下型だぜ！」

「詳細な情報は不明！」

首都直下型地震・・・最も恐れられている地震である。発生した場合、首都崩壊もありえ、準備が盛んに勧められているも予測している時期より１０年早かつた。

「来るぞ！」

だが、いまいち弱い地震で済んだのであつた。

それだけだつた、筈であつた・・・

国会議事堂のとある一室

「とりあえず、明日の休暇を使って涼宮ハルヒの憂鬱をまとめて買

つてから雪風の最終巻を買っよ。」

そういうのはユリシース国を代表する・・・総理大臣こと東郷和馬である。当選後、早々に何故か総理大臣となったが腕は確か・・・なはず。

「首相！いい加減、公務中のプライベートな会話はお控えください！」

「いいではないか。ただでさえ、激務なのに！」

怒るのは総理の秘書・・・ミント・スタージュである。東郷総理にはちよつとした恋心を抱いているも、アニメ・ゲーム好きの総理に呆れているばかり。みんと本人もアニメ・ゲーム好きであるが、隠し趣味・・・ミスNo.1もびっくりな美貌を持ち、金髪かつスタイル抜群の美人秘書である。

「東郷総理！緊急事態です！」

「どうした！？」

慌てて電話を切る。

「地震の被害状況ですが・・・」

「今のは震度2くらいだろ？被害はそんなにないだろう・・・」

「（こいつ・・・）」

「全衛星からの通信途絶、海外へのネットワーク接続不可・・・」

「・・・ジョーク？」

「・・・いいえ。」

「後、竹島の韓国人に脅しに行ったアーレイバーク級ミサイル駆逐艦『フレアボム』からですが、竹島が目の前から消えたとの事です。」

「

「超次元だな・・・」

「おかしなことにグリーンランド戦争へアメリカ軍の援軍として派遣した筈のあたご型護衛艦がここから200海里先にて航行しているとのこと・・・」

「ワープだよな？ここはアニメかゲームの世界か！？というか入り込んだ！？」

「まだ確証は・・・現在、ユリシーズ大陸全土が無事なのは確認しました。ただ沖縄が・・・四国の真下に・・・」

「地質学は俺の専攻ではないし、高卒だ！大学の問題はからまんでくれ！」

「専門家を全国一斉招集したいのですが、マスコミの野郎どもに有名人をとられまして・・・しばらくはかかりそうです。」

「マスゴミ風情が！」

首相官邸で混乱している中、更に情報が入ってきた。

「ユリシーズ空軍司令官のカール・ジョンソン（略してCJ）です。」

「入りましたえ！」

「現在、日本周辺を空中給油機全機と・・・総理の趣味で量産したFFR-31MRからの偵察情報ですが、こちらが超高高度撮影によつて撮られた映像です。領空侵犯しておりましたから冷や汗ものでしたよ・・・あちらさんなら良くやってましたが・・・」

「この場所って・・・」

「韓国の済州島がある地点です。昨日、更新された地図と比較しましたが、間違いありません。」

「緊急招集を掛ける必要があるな・・・ところでFFR-31MRはどうだ？」

「ええとですね・・・とりあえず、アニメと同じ性能にしろの成果は表れました。空軍パイロットからの評価は 5を付けても足りない

いくらいとのことですよ。」

「軍務大臣へ緊急連絡！FA-1、FFR-31 シルフィードの量産を命令！」

「始まったよ・・・（全く、FFR-31MRや61式戦車にF/A-27、拳句にアドミラル56型までリクエストする無茶っぷり・・・それを実現するユリシイズ・エレクトロニクス社も凄いが・・・）」

ユリシイズ・エレクトロニクス・・・ユリシイズ国唯一の軍事会社。宣言通りに緊急招集がかかり、全議員・全知事が出席した。

そこで最初の議論が現在のユリシイズ国の立場・・・それに加え周辺国家の消滅・・・衛星との通信消滅の原因の特定について26時間もの間続いていた。

この状況では流石に野党もヤジが飛ばせず、マスコミの首相叩きはなかったが、いまいち議論が進まずにいた。

それから数時間後、

皇居

ユリシイズ国の象徴たる存在である天皇のもとに東郷首相は赴いた。

「陛下、急用と聞き馳せ参じました。」

「東郷首相、今の状況からして・・・他の者は下がっていてくれ。」

スタッフを退けると突如、天皇は天皇らしくない態度をとったのであった。

「和馬、とりあえず状況を再度処理をしなければ何も始まらないぞ。」
「分かっているよ。とりあえず、光宏には老人どもを抑えてもらいたい。」

首相と天皇との関係・・・類は友を呼ぶと言われており、天皇も”オタク”である！自称”マニア”であるが・・・架空兵器実現化計画を承認したのはオタク魂が燃えたのもある。アドミラル56の進水式に24時間も前に一番乗りしたのは伝説である・・・

「とりあえず、スーパーシルフの偵察範囲を広げてみよう。空中給油機も1カ所に複数集中させてみよう。」

「とすると・・・パイロットを慎重に選ばないといけませんな。」
「確かに・・・前例の無い飛行時間になるかもしれんな。いつそう、バンシーでも造るか？」

「無理じゃないか？確かにエレクトロニクスに無理言ったが、常識的に考えてあんなでか物・・・今の技術では実現不可能だ。しかも・・・飛行石持つてこい！と無理難題言われるし・・・」

「異世界にあつたりしてな！」
「な訳あるか！」

話し合いの結果・・・周辺地域の偵察範囲を広げるだけに終わった。ユリシイズ国内ではピンチになりかけていると思いきや、大きな混乱が起きなかったが、同時に怪奇現象も複数発生している。

1、海外旅行や移住等、海外にいるユリシイズ人全員が日本の空港や港等の玄関口に出現した事。

2、様々な機械が突然、故障しなくなった。又、壊れた機会も復活

した。

3、大気中に新たな物質が確認された事。

4、Gがどのような機動や動きをしても掛からない事

他多数あった。テレビでの特集では随時検証が行われていたが、解決する事はなかった。

ユリシイズ国では一国のみでの生存が十分に可能である国の為、資源などの問題は生じなかった。石油もその他資源も各地域にて永久分の採取が可能であった。

トリップしてからの数日後である。

ユリシイズ軍威力偵察専門部隊ともいわれる第501偵察情報団（FFR-31MR専門部隊）より一つの知らせが首相官邸に飛び込んできた。

「西方に巨大な大陸を確認せり。ユーラシア大陸の倍はある・・・か。」

異世界人への接触

新たに発見された大陸はユーラシア大陸とほぼ同じ位置にあり、ある期待とある不安が横切っていたが、早速部隊に出発を命じた。

向かったのはユリシイズ陸軍第7歩兵小隊である。本来の部隊としての機能は対テロリスト専門部隊であるが、機動力が優れているということで選ばれた。編成人数は4名程・・・後方支援はユリシイズ海軍第5アルバロン艦隊のAH-64Dが待機しているも燃料の都合上、支援要請を受けない限り発艦はしないこととなっている。

隊員名と兵科

アレンドロス・シモヘイ	伍長	偵察科
バルボッサ・スパロー	軍曹	突撃科
ニコ・ベリック	軍曹	支援科
ローマン・ベリック	曹長	統合科であり隊長

ユリシイズ海

強襲揚陸艦より出発したMH-60Mは間もなく降下地点へ降りる予定だ。

「これから実戦・・・」

「おいおい・・・実戦じゃないぞ。開拓だよ！開拓！」

「それにしてもピクニック気分じゃないか？」

「俺の退役するタイミング伸びたよ・・・おかげで。」

「とりあえず目標は開拓だ。現地の住民との接触は一応許可されているが、万が一攻撃して来た場合は交戦の許可がおりている。」

「というか・・・何故開拓行動にこの4名しか採用されていないんだ？」

「さあな。」

降下地点へ降りた部隊は送迎へりを見送り、内陸へ進んでいく。

砂浜を抜けると目の前に広がるのは巨大な森であった。

「ここで海水浴したいな・・・」

と思うアレンドロス伍長。

「警戒しながら進むぞ。偵察情報団の地図が頼りになるが、何が出現するやら・・・」

森の中を進んでいく一行は人間と思わしき声がした為、身を隠す。

「この声・・・まさかの日本語だと!？」

トリップ前の世界では全世界共通であり日本語と言われておりました。

「待て待て・・・この世界で日本語とは。」

「静かにしろ!バルボツサ軍曹、様子を見る。」

「イエッサ!確認出来る範囲ですが、人数は目視及び会話から判断して5名。容姿は中世の平民レベル。武装は2名がロングソードに1名が弓の所持を確認。男性が2名、女性が3名で2名程・・・人間ではない・・・だと?」

「人間ではない?」

「人型というよりも架空作品で言えばエルフといったらいだろう。ちなみに2名の女性は美人だ。」

「見せろ!」

「アホか！」

「続けるが、服装と行動からしてなんらかの不確定要素から逃げていると思われる。」

「流石、一流軍用ハッカーだ。」

「関係ないか？」

「馬の声？」

耳が異常に良いアレンドロス伍長は手持ちの双眼鏡を手にして索敵を行うと6匹程の騎士と思わしき影を確認する。

「ここは映画の撮影という事を願いたいね。」

「映画ねえ〜」

「もつとかんだほうがいいかもな・・・あれは本物の騎士だぞ。しかも黒い鎧だ・・・」

猛スピードで走る黒騎士は逃走中の男女を追いかけており、1人の騎士が突撃する。護衛と思わしき男性が女性を草むらの中へ退避させ、ロングソードを構える。しかし、黒騎士のスピードに追い付かず、巨大ランスの串刺しとなってしまう。もう1人の男性はそれに恐れ、女性を置いて逃げようとするも、弓騎兵のボウガンの餌食となり、頭部を貫かれ死亡した。

「一言言わせてもらおう・・・直ちに母艦に連絡だ！」

「見ず知らずの国を早速敵にするんですか！？」

「優先すべき行為は3名の女性を救助する事だ。ニコ軍曹！」

「現在、許可を求めている。」

「各員、銃を構え！」

ニコ軍曹以外の隊員は一斉にSCAR-Lを構える。黒騎士は女性達を引っ張り出し、一カ所へ集めている。隊員は緊張している中、

ニコ軍曹は現状を報告し、指示を仰いでいる。

>> 強襲揚陸艦『ブライアンス』より第7歩兵小隊”バッドチーム”へ、当艦よりブラックホークが発艦した。上層部は現状を把握・攻撃の許可が下りた。救助を優先せよ。<<
「ファイアー！」

一斉に火が吹く・・・音速で飛ぶ弾丸は”あ”という間に6人ば黒騎士を貫き戦闘不能へ陥れた。

直ぐに女性のいる方向へ猛ダッシュする隊員は3人の姿を確認すると無事な様子でほっとしていたが、服は破けており、ここでやるつもりだったのだろう・・・

バックパックより3名に衣類を差し出し着替えてもらい、着替えが終わった時点で自己紹介を行った。

「助けて頂いてありがとうございます。私はハイニユ・ギルバード。」

「私の名はラクランシュ・テラでこっちがフェル・ハイドです。見ての通り私と彼女はエルフです。」

「ユリシーズ陸軍第7歩兵小隊所属のローマン・ベリック曹長です。こちらは左よりニコ伍長、アレンドロス伍長、バルボツサ軍曹。」

「ユリシーズ？」

「聞いた事は？」

「初耳よ・・・それに姿からしてこの世界の人は思えないわ。」

「ハハハ！そりゃ失礼！なんせ異世界から来た者ですからね！」

「異世界！？」

「これはまたどういう経緯でこちらの世界に？」

「それが全く不明なんですわ！何か兵器の実験で失敗かと思いまし

「ただね！」

「それより、なぜあの黒騎士より逃げていたのですか？」

「昨日の事です。私達の住む村が突然、黒騎士団に襲われたのです。」

「異国の侵略と言っやつか？」

「恐らく・・・」

とりあえず、3人だけにしてどうするか話しあった。こうなった以上は現地に留まるわけにもいかず、撤収を決定した。3人の女性は緊急保護という形とした。政府も即承認してくれた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2065y/>

チート国家、異世界へ

2011年11月21日13時39分発行